

サイ・テラ 知と技の発信

【596】

埼玉大学・理工学研究の現場

渋沢といえば埼玉県民でなくとも2024年からは1万円札の「顔」にもなった渋沢栄一を思い浮かべるでしょう。渋沢元治（もとじ）は、その渋沢栄一のおいで明治9（1876）年に埼玉県血洗島村（現在の深谷市）の農家に生まれ、明治30年代以降に急速に増加した電力需要を支え、日本の産業、社会の発展のための電気事業の構築に大いに貢献した人物であり、その後、東京帝国大学（現在の東京大学）工学部電気工学科の教授として後進の教育にも力を注いだ人物でもあります。

東京大学工学部の電気系会議室には、現在も渋沢元治より東京大学に寄贈された「捕雷役電」と刻まれた木彫りの扁額が掲げられています。「捕雷役電」をそのまま読むと「雷を捕らえて電気に役立てる」と読めますが、その精神の下さまざまな電気現象を把握し、広く社会に役立てるという「科学探求の精神を現すもの」と解釈されています。

元治は、小さいころからとても優秀でしたが、当時埼玉県下には中学校以上の学校はなく、両親からは家業を継ぐには学問は不要と反対されていたものの、叔父栄一の後押しもあつて東京帝国大学の

「捕雷役電」と渋沢元治

長谷川 有貴 准教授



はせがわ・ゆき 1975年生。2001年3月埼玉大学大学院教育学研究科修士。05年9月博士（工学）。埼玉大学大学院助教を経て、14年6月から現職。専門は植物生体計測や味覚センサ、嗅覚センサシステムの開発などの生体計測工学。

電気工学科へと進み、その後の活躍の礎となる学問を修めました。

東京帝国大学卒業後、一度は働くことを決めますが、もつと電気工学を学び社会に役立てたいとの思いを叔父の栄一に伝え、栄一らとともに海を渡り、明治35（1902）年5月から明治39（06）年1月までの約3年9カ月間、アメリカのジェネラル・エレクトリック社やドイツのシーメンス社で工場実習を受けたり、日本の河川と条件の似ているスイスで水力発電を学んだりするなど、世界最先端の電気工学と技術、そして電気事業の在り方を学び、日本に帰国しました。

帰国後は、逓信省の技術者として、明治40（07）年に運転を開始



した大容量の電気を東京に送電した最初の発電所である山梨県駒橋発電所の主任検査員となるなどさまざまな事業に関わりましたが、検査基準も試験方法も定まっていなかったため、そのときに渋沢が確立した基準がその後の検査基準になるなど、明治44（11）年の電気事業の保安と保護を目的とした電気事業法の制定にも大きく貢献しました。

そんな渋沢元治によって書かれた「捕雷役電」の扁額が、実は埼玉大学工学部の電気系会議室に掲げられています。写真・書には昭和45（70）年秋九十五歳満洲元治書」とあり、99歳で亡くなるまで渋沢先生が95歳の時に寄贈いただいたものであることが分かります。渋沢先生のように信念をもつて「科学探求の精神を大切に、研究に教育にまい進していきたい」と思っている春の日の雑談でした。